

教職科目「合奏」授業におけるフルート・アンサンブルの有効性 —初心者から上級者までを包摂する指導法の構築—

島田 亜紀子 坂本 光太
(教育学科非常勤講師) (教育学科助教)

本研究の目的は、中学校・高等学校教諭（音楽）教職課程の必修科目「合奏」にフルート合奏を導入した際の教育的意義を明らかにし、実践を通じて得られた成果と課題を検証することである。リコーダー合奏が主流とされる現状に対し、管楽器特有の呼吸法や表現力を伴うフルートの活用に着目し、初心者と上級者が同時に在籍するクラスでの指導法を検討した。具体的には、学生の自主性向上や演奏技術の習得、楽譜アレンジや役割分担の工夫などを取り上げ、授業全体の設計例としてシラバスを提示する。最後に、単一楽器合奏による音楽教育の可能性と今後の課題について考察し、フルート合奏が教職課程における合奏授業の新たな選択肢となり得ることを示した。

キーワード：教職課程、フルート合奏、単一楽器合奏、初心者と上級者の混在

1. はじめに

中学校・高等学校教諭（音楽）の免許を取得するための教職課程において、「器楽（合奏及び伴奏並びに和楽器を含む）」は必修科目とされている。学生が将来、中学校・高等学校での音楽教員として活躍するためには、ピアノや声楽のみならず、管楽器についての知識や演奏方法も理解することで、実践的な指導力の育成のための基礎知識習得につながる。

必修の教職科目として「合奏」に取り組む際、大学で行われる授業には、履修者全員がほぼ同程度の演奏能力を持っているリコーダーを用いて行われる場合が多くみられ（埼玉大学, 2024他）¹、またリコーダーを使用した「合奏」に類する授業についての事例研究も報告されている（飯村, 2023）。というのも、合奏の授業を行うにあたっての障壁の一つに、受講者各々の演奏技量レベルの差があげられるからである。ピアノや声楽専門の学生など、自分の専門以外の楽器で合奏を行うと、受講者全員の演奏技量が同一でない。そのため、通常編成の合奏（プラスバンドでの多種楽器形態）を行うことは、学生

にとっても、また教員にとっても困難である。

実際の教育現場では、筆者のこれまでの経験上、新しい楽器を演奏してみたいという意欲を持つ学生が多い一方で、リコーダーには「小学校で履修した安易な楽器」という先入観があり、合奏への取り組みが消極的になりがちである。そこで本稿では、学生の自主性を促進するための代替手段として、フルートを合奏の授業に導入し、その教育的意義と生じうる課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、筆者の過去の授業実践を踏まえ、初心者と上級者が混在するクラスでも取り組むことのできる合奏形態としてフルート合奏を検討し、その成果や課題を総合的に考察する。

本稿では、大学の必修教職科目として行われる「合奏」の授業にフルート合奏を取り入れた実践事例をもとに、学生の演奏技能や指導力の向上について論じ、さらには教育的効果や課題について総合的に考察する。「1. はじめに」では、合奏授業においてリコーダー以外の楽器を用いる意義と、その背景にある課題を提示する。続く「2. 合奏の授業の教育的価値」では、文部

科学省が定める教職課程における器楽履修の意味と、合奏がもたらす教育的効果について論じる。「3. リコーダー合奏」では、現行の合奏授業で用いられるケースの多いリコーダーに着目し、その利点や問題点を整理する。「4. フルート合奏」は、フルート・アンサンブル（フルート・オーケストラを含む）の特徴を概説し、「5. 単一楽器、フルート合奏の授業の可能性についての考察」では、筆者が担当した授業実践を中心に、その成果と課題を検討する。「6. 『フルート合奏』シラバス試案」では、これらの知見をもとにしたシラバスの試案を示し、「7. おわりに」にて、本研究のまとめと今後の展望を述べる構成とした。

2. 合奏の授業の教育的価値

文部科学省が定める教職課程において、器楽を履修する意義は、合奏を通じて音楽教育の基本的な理念や技術を実践的に学び、教師として必要な指導力や音楽的知識を深めることにある。これらは音楽の教員免許を取得するうえで、極めて重要な役割を果たしている。

合奏では、他者との密接なコミュニケーションに基づいて演奏が展開されていく。このプロセスを通じて、学生は単に技術的なスキルを習得するだけでなく、教育者として必要な多様な能力を養う機会を得る。以下にその例を挙げる。

2.1 協働性とチームワークの育成

合奏活動は、個々の演奏者が一つの音楽作品を共同で創り上げる過程であり、協働性とチームワークの重要性を自然と学ぶ場である。各学生が自分のパートを、責任を持って演奏することで、全体の調和を図る必要性を理解し、他者の役割を尊重する姿勢が養われる。

2.2 コミュニケーション能力の向上

合奏では、演奏中に細かな調整や意思疎通が求められるため、非言語的なコミュニケーション能力が自然と向上する。例えば、音量やテン

ポの調整、表現の統一など、演奏者同士が瞬時に意思を伝え合う必要が生まれてくる。

2.3 音楽的表現力と創造力の向上

合奏活動を通じて、学生は単に楽譜に記された音符を演奏するだけでなく、音楽的な表現力や創造力を発揮する機会を得る。アーティキュレーション、ダイナミクス、テンポの変化など、細かな表現技術を他の演奏者と調整しながら創造することで、音楽全体としての完成度が高まり、表現力が向上する。

2.4 音楽理論の実践的理解

合奏活動は、音楽理論の実践的な応用場面を提供する。和声、リズム、構造などの理論的知識を実際の演奏に反映させることで、具体的な音楽理論の理解が深まり、実践的な指導力が向上する。これにより、教職課程において学んだ理論を効果的に教えるための具体的な方法論を体感することができる。

2.5 リーダーシップとフォロワーシップの経験

合奏活動においては、リーダーシップを発揮する機会と、フォロワーシップを学ぶ機会が共存する。指揮者やリーダーが存在する場合、その指導に従うが、状況により反対に自らリーダーシップを取るべき場面も生まれてくる。これらの経験により、学生は適宜適切なリーダーシップとフォロワーシップを体感し、柔軟性を身につけることができる。

2.6 情緒的・社会的発達の促進

音楽合奏は、感情を共有し、共に創り上げる体験を通じて、情緒的なつながりや社会的なつながりを深める機会を提供する。共同で目標を達成する喜びや困難を乗り越える経験は、学生の情緒の安定や社会的なスキルの向上に寄与する。

2.7 実践的指導力の育成

合奏活動を指導するため、学生は効果的な指導方法や教育技術を実践的に学ぶことができ

る。具体的には、練習の計画立案、個別指導の方法、グループ・マネジメントなど、将来教員として必要な指導力を養う機会が豊富に存在するといえる。

2.8 多様性と包括性の経験

合奏には様々な背景やスキルレベルを持つ学生が参加するため、多様性と包括性の重要性を学ぶ場ともなる。異なる意見やアプローチを尊重し、調和を図る経験は、個々の音楽的視点や価値観が多様であっても、それらを活かし合うことで新たな創造性や学習効果を引き出す契機となる。たとえば、熟練した学生が初心者を支援するだけでなく、反対に初心者から学べることも多々生まれるなど、その相互作用によって双方の理解が深まる。

これまで挙げてきたように、合奏の授業は、単なる音楽技術の習得にとどまらず、協働性、コミュニケーション能力、音楽的表現力、自己管理能力、リーダーシップなど、多岐にわたる教育的価値を持つ。これらの能力は、音楽教員としての総合的な資質を高めるために不可欠であり、将来の教育現場において実践的かつ効果的な指導を行うための基盤となる。したがって、合奏の授業は音楽科教員免許取得において重要な役割を果たしており、その教育的価値を最大限に引き出すための指導方法やカリキュラムの工夫が求められる。

3. リコーダー合奏

音楽科教育の現場にて大切な表現方法の一つである合奏の形態を習熟するためには、先に述べたように、履修生のほぼ全員が経験したことのある楽器、つまり義務教育で学んできたリコーダーを使用して開講される場合が多い。

実際の授業では、リコーダー演奏にプランクのある学生が多いため、ガイダンス時に現状の演奏技量を確認して、合奏の幅を広げていく。使用楽器は、ソプラノリコーダー、アルトリコーダーから始め、テナーリコーダー、バスリコーダーなどを増やし、音域を幅広くしていく。

編成は、合奏の最小単位である2重奏から始め、3重奏、4重奏、大編成のアンサンブルと形態を広げていくことも可能である。

学生各々が楽器を所有している場合も多く、音は確実に発することができ、運指も管楽器と比べてはいけないが平易なため、大学教育現場よりは導入として好まれる形態である。

一方問題点としては、合奏の授業で学生がリコーダーを好んで自発的に取り組めているか疑問が残る。著者は他大学にてリコーダー合奏の授業を指導した経験があり、しばしば感じたことであるが、リコーダー合奏への学生の価値観は、小学生の時に履修した安易な楽器であり、少し軽視している印象を受け、高度な演奏探求に結びつかずに入っている事例も見受けられた。

リコーダーで学生が自ら探求心を持ち積極的にリコーダー合奏に取り組むことが出来れば、将来教員になった際に役立つよう、リコーダーの演奏法やアンサンブルを含む指導法を学ぶことは有益である。しかし、全ての学生にリコーダー合奏が良い方向に作用していないと感じることがあったため、次に、他の单一楽器でのアプローチ法として、フルート合奏の可能性について考察したい。

4. フルート合奏

フルート合奏の可能性を考察する前に、本章では一般的なフルート合奏について論説する。

フルート・アンサンブルとは、デュオから小編成のアンサンブル、さらには大規模なフルート合奏を含む演奏形態のことを指す。18世紀末から19世紀にかけては、フルート同士で演奏するための作品がヨーロッパ各地で盛んに作曲され、演奏家や音楽愛好家の間で親しまれていた。たとえば、フリードリヒ・クーラウ D. Friedrich Rudolph Kuhlau (1786-1832) やフランツ・ドッpler A. Franz Doppler (1821-1883) といった作曲家は、フルート2重奏(デュオ)を中心とした室内楽作品を複数手がけており、フルート同士のアンサンブルの普及と発展に寄与してきた。

現代になると、プロやアマチュア、学生やジ

ユニア奏者など、多様な立場のフルート奏者がアンサンブルの演奏を楽しむようになった。複数の特殊管（ピッコロ、アルト・フルート、バス・フルート、コントラバス・フルートなど）を加えた大規模なフルート合奏を「フルート・オーケストラ」と呼ぶ²。この編成では、クラシックの名曲を編曲したり、現代作品を委嘱したりする活動も盛んに行われている。

日本各地で活動するフルート・オーケストラでは、プロ奏者から音大生、アマチュア奏者、さらにはジュニア世代の奏者まで多様なメンバーが集い、コンサートやイベントで演奏を披露している。例えば社団法人日本フルート協会が主催する日本フルートフェスティバル 2025 では、ヨハン・シュトラウスのワルツなど親しみやすいプログラムからヴェルディ《運命の力序曲》のような大作、さらには新作の初演に至るまで幅広いレパートリーを取り上げ、多くのフルート奏者の活躍の場となっている（表 1）。

表 1 「第 45 回日本フルートフェスティバル 2025 in 東京」曲目（Japan Flute Festival in Tokyo, (n.d.)）

〈プログラム〉
○アマチュアフルーティストによるフルートオーケストラ
J. シュトラウス 2 世：美しく青きドナウ
J. ヨハン・シュトラウス 1 世：ラデツキー行進曲
○ジュニアフルーティストによるアンサンブル
J.S. バッハ：主よ人の望みの喜びを
L. アンダーソン：踊る子猫、舞踏会の美女
○音大生によるフルートオーケストラ
G. ヴェルディ：運命の力序曲
○プロフルーティストによるフルートオーケストラ
青島広志：コラール変奏曲
青島広志：フラウト家の一族（委嘱作品）

こうした取り組みは、フルートの教育や愛好家同士の交流にも大きく貢献している。初心者や学生は、経験豊富な奏者と共に演し舞台で演奏を披露できる喜びを体感し、技術力や表現力を習得できる。一方、上級者やプロ奏者は、若い世代やアマチュアへの指導・助言を通じてフルートアンサンブルのさらなる発展を促している。



図 1 メトロポリタン・フルート・オーケストラ
(アメリカ) の練習風景
(The Metropolitan Flute Orchestra, 2024)

5. 単一楽器、フルート合奏の授業の可能性についての考察

5.1 「管・打楽器基礎」授業概要

前章で述べたフルート合奏を、教職科目「合奏」の授業において活用できるかの検討のため、まずは筆者がこれまでに指導した関連授業である「管・打楽器基礎」という授業について解説したい。

筆者は、「管・打楽器基礎」（玉川大学芸術学部）を 2018 年度まで受け持ったこと（島田, 2017）をきっかけに、单一楽器、フルート合奏の授業の可能性について考察した。この「管・打楽器基礎」の主旨は、学生が将来中等教育の音楽科教員として求められる管打楽器の基礎知識を深めると共に、管打楽器指導力習得のための実践的演習を行うことであり、1 年次の学生のために開講された講座である。授業では、音程が定められている鍵盤楽器とは異なり、音を発音すること自体が困難であると言われる管打

教職科目「合奏」授業におけるフルート・アンサンブルの有効性

楽器の知識と経験をより多く積み、将来現場での音楽家教員の資質向上に繋がると考え、座学である「講義」と「実技演習」の双方を取り入れ授業進行をした。

「講義」においては、各管打楽器の歴史、形態、構造などを含めた楽器学や、移調楽器の読譜法などを踏まえた演奏法を主な単元とし、「実技演習」においては、木管・金管・打楽器の各分野でそれぞれ一種の演奏実践を行った。とりわけ「実技演習」では、15回授業中10回の授業をフルートで行った。楽器は、履修者全員に大学から貸与し授業を行ったため、学生には負担がかからず授業に取り組むことができた。新たな管楽器を履修できるということで、多くの学生が自主的に研究している姿も多く見受けられ、当時最先端の教育であるアクティブラーニングとしても有益であった。

授業の到達目標としては、学生が学校の現場に出た際、授業や課外活動においても合奏を指導するが多くあることを見据えて、次の3点を挙げた。

- ①音楽科教員として管楽器指導を求められた際に必要な管楽器の知識を深める。
- ②木管・金管・打楽器それぞれにおいて一種ずつ楽器を体験し(現物を手に取り)、教職現場に出た際、学生に管打楽器指導を行える基礎作りを大学1年次より始め、今後の学業の指針を定める。
- ③教わる立場のみでなく、教える立場も経験し、実際に適した指導法には、どのようにアプローチしたら良いかを学生に考えてもらい、お互いに意見を出し合い、将来目標とする指導法のアイデアを構築していく。

5.2 実技演習をフルートで行った利点について
先に述べた通り、「管・打楽器基礎」では、木管・金管・打楽器の3分野での実習を行ったが、その中で特に木管(フルート)の実習を多く行なったのは、以下のような多くの利点があるためであった。

- ①楽器がコンパクトで取り扱いやすい。

②リコーダーと同じC調であるので読譜がしやすい。

③フルートの低・中音域の運指はリコーダーの運指に類似していて取り組みやすい。

④リコーダーと同じくエアリードの楽器のため、息の流れをダイレクトに意識しやすい。

⑤リコーダーより息の圧力や息のスピードが必要であるので、将来木管・金管楽器(吹奏楽)を指導する際の教職現場で役立つ。

⑥演奏できる音域が広がることで学生自身が自分の進歩状況を把握しやすく、達成感をもちやすい。

これらの理由から、フルートは初心者を含む合奏には効果的なツールであると考えられる。

5.3 「管・打楽器基礎」使用楽器について

授業では、大学から貸与された「Nuvo Student Flute」(表2、図2)を使用したことでも特筆すべきである。

Nuvo社は、安価ながら本格的な教育用プラスチック製の管楽器を製造している会社である。「Nuvo Student Flute」は、本体がプラスチック製で、キーパッドにはシリコンラバー、ジョイント部にはステンレススチールが用いられている。1本あたり2万円弱で入手可能であり、通常の金属製楽器に比べて手頃な価格で、初めて管楽器を扱う学生にとって非常に導入しやすいといえるだろう。楽器は完全防水仕様であり、一般的な金属製楽器よりも耐久性が高く、取り扱いが容易である点が特長的である。また、軽量設計のため、楽器重量による負担が軽減され、初心者でも無理なく演奏に取り組むことができる。このような特徴により、初心者が挫折することなく、安心して練習を進める環境を提供することが可能となった。

また、メンテナンス性の高さも大きな利点である。水洗いが可能で日常の手入れが簡単であり、使用後の管理に手間を取らないため、教育現場での使用において非常に実用的であった。更に、運指が難解な木管楽器において、初級者向けの補助パーツや拡張オプションが用意されている点も特筆すべき点である。これらのオプ

ションにより、学習段階に応じて楽器を調整でき、学生一人ひとりの成長に合わせた柔軟な対応が可能となった。

以上の特徴を踏まえると、「Nuvo Student Flute」は、初心者向けの教育的用途において非常に適した楽器である。その手軽さや実用性は、初心者の学生に新しい楽器での演奏の楽しさを伝承することができ、授業の効果を高める上で重要な役割を果たした。

表 2 Nuvo Student Flute 基本仕様(KC Music, (n.d.))

音域：C 4～C 7
運指：一般的なフルートと同じ運指
管体／キー：プラスチック製
キーパッド（タンポ）：シリコンラバー
ジョイント部：ステンレススチール
完全防水仕様
本体重量：約 225g
本体全長：約 66.5cm ※ 一般的なフルートは全長約 65cm
C 調
C 足部管
オフセット G
※別売りオプションにて拡張可能



図 2 Nuvo Student Flute (KC Music, (n.d.))

5.4 単一楽器、フルート合奏の授業の可能性

単一楽器、フルート合奏の授業としては、前掲の「管・打楽器基礎」で行った授業導入方法を用いることが可能である。

受講生の中には、フルートを見たこともない学生もいる中、初心者への導入としてまず始めに取り組むべきことは、楽器の取扱い方法（収納方法・組み立て方）、発音練習、持ち方、運指、呼吸法などであり、その内以下に特筆すべき数点を挙げる。

① 収納方法

フルートは、付属の楽器ケースに収納する。楽器の収納は、キイが多くついている面を上にして、無理のないように垂直に収納する。楽器ケースの中に異物を収納してしまうと、キイのバランスが変化してしまうため、使用したガーゼやクロスは、ケースの中に収納せず、ケースの外に保管する（図 3）。



図 3 楽器の収納 (KC Music, (n.d.))

② 頭部管の音出し

フルートは 3 部管構成であり、まず取り組むべき発音練習は、頭部管（図 4）での音出しである。音を出すためには、リッププレート（口を置く部分）に対する唇の位置や方向を指導し、息の吹き込み方を説明する。リコーダーと違い、フルートは唇を楽器にのせるのみであるため、正確な位置を図解で説明したり、学生同士でペアを組みお互いを確認し合うなど、綿密な先導が必要である。



図4 頭部管 (KC Music, (n.d.))

③ 組み立て方

頭部管での練習が出来たら、実際に楽器を組み立てて実技演習を行う。まずは頭部管と胴部管をつなげ、その後足部管をつなげる。つなぎ合わせる際は、無理にねじ込まず、慎重に回し入れていく。管体をつなぎ合わせた後は、各人の身体的特徴に応じて微調整を行い、音が出しやすい角度を各々調整する。最終的なセッティング位置については、指導者の確認を要する。

④ 呼吸法

演奏する際には、腹式呼吸法を用いる。腹式呼吸法は、胸を開かずに横隔膜を意識して息を吸う呼吸法で、演奏に十分な息を吸うことができる。息を吸うときに肩が上がらないように、体全体の力を抜いてリラックスした状態で行い、息を吐き出す時は、圧力をかけて一定のスピードで維持する。日常生活とは呼吸法が違うことを認識させる必要があるため、指導者の先導が必要である。

5.5 単一楽器、フルート合奏の授業の実践（成果と課題）

上述の流れに沿って導入を行った後、学生が楽器で発音できるようになれば、合奏の授業として実践していくことができる。まず最初には、小編成のアンサンブル（ペア合奏）から合奏を

行い、人数を増やしていきアンサンブルを発展させていくのが望ましい。

ペア合奏→トリオ合奏→グループ合奏→
大編成合奏

しかし合奏の授業においては、初心者と上級者が同時に履修していることが大きな課題として挙げられる。一般的に、指導者は演奏技能が近似した学生をグループ化する方が指導しやすいと考えがちであるが、合奏は必修授業であるという性質上、実際にはさまざまなレベルの学生が混在するのが現状である。たとえば、読譜やリズムに苦戦する学生がいる一方で、音程の聴き分けやチューニングが不得手な学生も存在し、それぞれの支援方法や指導計画は一様には定めにくい。合奏を必修科目とする以上、こうした技能差は避けられない前提と捉え、指導者はあらゆるレベルの学生にとって学習効果の高い授業を実現する方策を検討する必要がある。

筆者が「管・打楽器基礎」で指導した経験上、初心者と上級者が混在する合奏における具体的な状況と対応策としては、次の3項目を示す。

① 演奏技能レベルが高度な学生を指導役に
指導者（教員）が1人である合奏の授業においては、初心者全てに対する綿密なフォローは困難である。

そのフォローアップとして、学生間で初心者と経験者を交互にシーティングしたり、初心者をグループ分けし経験者を指導役とすることで、初心者の演奏技量を向上させることができる。一方でこの方策は、経験者においても有益である。経験者が指導役になることで新たな目的を見出し、解決策を模索することができるので、双方にとって効果的な影響をもたらすといえる。

② 学生自身で次の改善課題を決定させる

指導者（教員）が次の課題を明確に決定するのではなく、学生間で自主的に次の改善課題を見出し、解決策を模索するようにすると、行動が自動的になるだけでなく、音楽の方向性も前

進していく。学生間で適切な決定を下すことができるようになると、結果としてパートの連帯感も高まり、演奏基準の向上につながる。指導者（教員）は、適宜見守り、適切な方向に導くことは勿論である。

③ 楽譜をアレンジする

初心者と上級者が混在する合奏においては、選曲が難しいが、初心者／上級者の双方サイドから選曲をすることが推奨される。初心者サイドの曲を演奏する際には、上級者には新たな目標としてパートに書き換えること（アドリブ）を課題として与えたり、また、上級者サイドの曲を演奏する際には、適宜、楽譜の通り演奏するのではなく、強拍のみ、または1拍目と3拍目のみといった簡易的なオプションを明確に指示して演奏させるなどするとよい。こうしたア

レンジを行うことで、初心者にとっては演奏負担が軽減される一方、上級者にとっては新たな技術的・表現的課題に取り組む機会が生まれる。結果として、技能レベルの差を音楽づくりの一部として活かしながら、全体の演奏水準やアンサンブル力を底上げする効果が期待できる。また、将来教壇に立った際、実地での応用力向上としての利点も期待できる。

6. 「フルート合奏」シラバス試案

本章にては前掲の意義や課題を踏まえて、単一楽器、フルート合奏として授業を行う際のシラバス案を提示する（表3）。なお、シラバスの様式は京都女子大学のものに準ずる。

表3 シラバス試案

授業科目名	フルート合奏
授業のテーマ	初心者から経験者までを包摂する様々な形態のフルート合奏
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・器楽アンサンブルの基礎（チューニング、ユニゾン、ハーモニー、タイミング、バランス、リズム、テクスチャー）を学び、学習指導要領に則した音楽科教育を行うための基礎的な合奏技能を修得する。 ・受講者と指導者の双方の立場を体験する。 <ul style="list-style-type: none"> -受講者としては自分自身のフルート演奏技術を高める。 -指導者としては効果的な指導法を考えることができるようになる。 ・調和や協調の感性を養い、共に音楽表現を工夫できるようになる。 ・異なる時代様式や合奏形態に即した、演奏技術と音楽表現を身につける。
形態	対面
授業の概要	<p>器楽合奏の基礎を学ぶと共に、実際の合奏を経験しながら考えていくことで、教育現場において必要になる「合奏」について見地を広げる授業である。</p> <p>初回ガイダンスにて各々の楽器経験を確認し、習熟度別の人数に応じて、その後のアンサンブル編成を決めていく（2重奏、3重奏、4重奏、アンサンブル、大合奏と、状況に応じた編成）。</p> <p>授業では、初心者はまず、楽器の扱い方から学ぶ。経験者は基本奏法を確認した後、音階練習の基礎合奏、コラールと進めていき、受講者と指導者の双方の立場を経験する。初心者と共に、対象曲を演奏できるように同レベルの練習曲を作ることによって練習を深め、発表曲を仕上げていく。第15回の授業時には、全員参加の大合奏（演奏会形式発表会）を行い、これまでの成果を披露する。</p> <p>各自の楽器経験を活かし、全体のバランスを考慮しながら、パートの割り振り</p>

教職科目「合奏」授業におけるフルート・アンサンブルの有効性

	<p>を行い、状況に応じた編成で授業を進行する。</p> <p>なお、受講学生の楽器の習熟度によって楽曲を変更する場合がある。</p>
学位授与の方針との関連	<p>(知識・理解)</p> <p>「教育学に関する専門的知識を有している」に基づき、合奏を通して音楽実践への理解を深める。</p> <p>(対話・相互理解)</p> <p>「他者を尊重しながら、論理的なコミュニケーションによって相互理解・調整に努め、様々な人々と協働できる」に基づき、合奏という音楽実践を通して他者と調整・協働することができる。</p>
授業計画	<p>第 1 回 ガイダンス、習熟度判定、楽器の扱い方、基礎合奏と基礎知識</p> <p>第 2 回 基礎合奏、2重奏 ハーモニーの練習（上級者：指導役として）</p> <p>第 3 回 基礎合奏、2重奏 カッチーニ《アヴェ・マリア》譜読み [譜例 1]</p> <p>第 4 回 基礎合奏、2重奏 カッチーニ《アヴェ・マリア》実践</p> <p>第 5 回 基礎合奏、3重奏 ハーモニーの練習（上級者：指導役として）</p> <p>第 6 回 基礎合奏、3重奏『ふえはともだち』より 譜読み</p> <p>第 7 回 基礎合奏、3重奏『ふえはともだち』より 実践</p> <p>第 8 回 基礎合奏、4重奏 ハーモニーの練習（上級者：指導役として）</p> <p>第 9 回 基礎合奏、4重奏『リコーダーアンサンブルの基礎と技法』より 譜読み³</p> <p>第 10 回 基礎合奏、4重奏『リコーダーアンサンブルの基礎と技法』より 実践⁴</p> <p>第 11 回 基礎合奏、大編成 ハーモニーの練習（上級者：指導役として）</p> <p>第 12 回 基礎合奏、大編成合奏 譜読み① 前半部分</p> <p>第 13 回 基礎合奏、大編成合奏 譜読み② 後半部分</p> <p>第 14 回 基礎合奏、大編成合奏 実践</p> <p>第 15 回 発表会</p>
参考書・参考資料等	<p>柳生力 (1973)『ふえはともだち：やさしい3重奏曲集』音楽之友社.</p> <p>吉澤実編著 (2002)『リコーダーアンサンブルの基礎と技法：改訂版』全音楽譜出版社.</p> <p>宇畑知樹監修 (2017)『デュオ練フルート：合奏の最少単位の「2人」で取り組む基礎練習』全音楽譜出版社.</p> <p>加藤克朗 (2024)『フルート教本：導入編：管楽器メソード・シリーズ』ドレミ楽譜出版社.</p>
学生に対する評価	<p>授業への取り組み 70%</p> <p>(普段の授業に対する取り組み、楽器演奏に対する姿勢などを評価する。毎週の個人練習も評価の対象とする。)</p> <p>演奏発表 30%</p> <p>(15回目の演奏発表の授業で演奏技術、表現力、合奏能力を評価する)</p>

譜例1 フルート・デュオのための《アヴェマリア》冒頭（G. カッチーニ伝、第3回の授業で使用）

Ave Maria

G. Caccini 伝

Andante ($\text{♩} = \text{ca. } 80$)

Flute 1: ♩ — — | o | ρ . | f | o |
 Flute 2: $\text{F} \# \text{ F}$ | $\text{F} \# \text{ F} \text{ F} \text{ F}$ | $\text{F} \# \text{ F} \text{ F} \text{ F}$ | $\text{F} \# \text{ F} \text{ F} \text{ F}$ | $\text{F} \# \text{ F} \text{ F} \text{ F}$ | $\text{F} \# \text{ F} \text{ F} \text{ F}$

pp p

7. おわりに

本稿では、フルート合奏という単一楽器による合奏形態を取り上げ、大学の必修教職科目「合奏」における実践事例をもとにその課題と可能性を考察してきた。従来、リコーダー合奏が主流とされてきた大学の合奏授業において、あえてフルートを用いた合奏を導入する意義は、学生の主体的な学習意欲を高めるだけでなく、管楽器ならではの呼吸法やアンサンブル技術をより深く体験させる点にある。一方で、初心者と上級者の技能差や、木管楽器特有の音程調整・発音の難しさなど、リコーダーとは異なる指導上の課題も浮かび上がる。しかし、こうした課題を克服する指導法の工夫や教材開発を行うことで、大学の教職課程においてはより幅広い楽器指導能力を獲得した教員を育成できる可能性が示唆される。

特に、初心者と上級者が混在する合奏授業においては、従来のように技能レベルごとに学生を分類するだけでなく、上級者を指導役に据えたり、初心者が簡易な譜面を担当する選択肢を用意したりするなど、柔軟な指導方法を実施することで、多様な学習者を同時に成長させるアプローチが可能となる。これは、「合奏の授業」を単なる演奏技術の伝達にとどめず、協同的な学びの場として活用することの有効性を示すも

のである。初心者が上級者の助言を得て着実に技術を習得する一方、上級者も指導を通じてリーダーシップや説明力といった教育的資質を磨くことができる。こうした双方向の学習効果は、教職課程に求められる「教育者としての力量育成」という観点からも高い教育的価値を持つ。

今後の展望としては、まずフルート合奏を取り入れる際のシラバスや評価基準、指導計画をより体系的に整備することが挙げられる。加えて、リコーダー合奏との比較研究を進めることで、単一楽器合奏ならではの学習効果や指導上の長所と短所を一層明確化することが可能となろう。さらには、フルート合奏の成果を義務教育や中高の吹奏楽指導など、実際の教育現場へ応用することも期待される。こうした一連の研究・実践を通して、音楽教員を目指す学生が多角的な器楽指導能力を身につけ、将来的に学校現場での質の高い音楽教育を担う人材として成長する一助となるはずである。

以上を踏まえると、フルート合奏は大学の教職課程における合奏授業の新たな選択肢として、有用性があるといえる。しかし、その導入には段階的な指導法の確立や評価の多角的な設計など、乗り越えるべき課題も少なくない。本稿の報告を手がかりに、今後さらなる実証研究や指導事例が積み重ねられることで、フルート合奏

教職科目「合奏」授業におけるフルート・アンサンブルの有効性

が教育現場に定着し、学生の演奏能力および教育的資質を総合的に高める効果的な手法として確立することを願ってやまない。

注

- 1) 合奏の授業でリコーダーを用いる大学の例には、埼玉大学の「合奏」(埼玉大学, 2024)、武庫川女子大学の「器楽合奏(応用音楽学科)」(武庫川女子大学, 2024)、京都教育大学の「合奏研究」(京都教育大学, 2024)、和歌山大学の「合奏法」(和歌山大学, 2024)、大分県立芸術文化短期大学の「合奏(音楽科)」(大分県立芸術文化短期大学, 2024)、滋賀大学の「合奏Ⅰ」(滋賀大学, 2024)などが挙げられる。
- 2) Flute choirとも。
- 3) リコーダーではなくフルートを使用する。
- 4) リコーダーではなくフルートを使用する。

引用文献・資料

- Crescendo Sistema. (n.d.). *フルートオーケストラ*. Retrieved December 23, 2024, from <https://www.crescendo-sistema.com>.
- 飯村諭吉. (2023). 「教員養成課程におけるリコーダー二重奏と器楽合奏の指導に関する一考察」『茨城大学全学教育機構論集 大学教育研究』茨城大学全学教育機構) 6号, pp. 69-80.
- 一般社団法人日本フルート協会. (n.d.). *フルートフェスティヴァル* 2025. Retrieved December 23, 2024, from <https://japan-flutists.org/festival/flute-festival-2025/>.
- Kansai Flute Ensemble. (n.d.). *Kansai Flute Ensemble*. Retrieved December 23, 2024, from <https://kansai-flute.crayonsite.net/>.
- 加藤克朗. (2024). 『フルート教本：導入編：管楽器メソード・シリーズ』. ドレミ楽譜出版社.
- KC Music. (n.d.). *Nuvo student flute*. Retrieved December 3, 2024, from <https://kcmusic.jp/nuvo/student-flute.html>
- 京都教育大学. (2024). *Syllabus 16202071 (2024)*. https://kyoumu.kykyo-u.ac.jp/2024/syllabus/16202071_00_Ja.html [科目情報「合奏研究Ⅰ」(2024)].
- Mahoroba Flute Ensemble. (n.d.). *Mahoroba Flute Ensemble*. Retrieved December 23, 2024, from <http://mahoroba-fl.net/>.
- The Metropolitan Flute Orchestra. (2024). *About the Metropolitan Flute Orchestra*. Retrieved December 23, 2024, from <https://www.contraflute.com/metropolitan-flute-orchestra>.
- 武庫川女子大学. (2024). *Syllabus 110910680 (2024)*. Retrieved December 27, 2025, from <https://www.mukogawa-u.ac.jp/~kyoumuka/syllabus/2024/html/110910680.html>. [シラバス参照「器楽合奏(応用音楽学科)」(2024)].
- 大分県立芸術文化短期大学. (2024). *Syllabus 2024_07_62014 (2024)*. Retrieved January 3, 2026, from http://jouhou.oita-pjc.ac.jp/syllabus/syllabus/2024/detail/2024_07_62014.html. [シラバス参照「合奏(音楽科)」(2024)].
- 埼玉大学. (2024). *Syllabus 02_Y18400 (2024)*. Retrieved December 26, 2025, from https://syllabus.risyu.saitama-u.ac.jp/syllabusHtml/2024/02/02_Y18400_ja_JP.html. [シラバス参照「合奏」(2024)].
- 島田亜紀子. (2017). 「管・打楽器基礎：音楽科教員としての管打楽器の知識と経験を得るために」『玉川大学芸術学部芸術教育学科 2016 年度 授業報告書』. (玉川大学芸術学部芸術教育学科), pp. 24-25.
- 滋賀大学. (2024). *Syllabus 1314126000 (2024)*. Retrieved January 4, 2026, from https://success.shiga-u.ac.jp/Portal/Public/Syllabus/DetailMain.aspx?lct_year=2024&lct_cd=1314126000. [シラバス検索「合奏Ⅰ」(2024)].
- 宇畑知樹(監修協力). (2017). 『デュオ練フルート：合奏の最少単位の「2人」で取り組む基礎練習』. 全音楽譜出版社.
- Universal Flute Orchestra Japan. (n.d.). *Universal Flute Orchestra Japan*. Retrieved December 23, 2024, from

[https://ufojapan.wixsite.com/universalfluteorch.](https://ufojapan.wixsite.com/universalfluteorch)
柳生力. (1973). 『ふえはともだち：やさしい3重
奏曲集』. 音楽之友社.
吉澤実編著. (2002). 『リコーダーアンサンブルの
基礎と技法：改訂版』. 全音楽譜出版社.
和歌山大学. (2024). Syllabus L1180024 (2024).
Retrieved Januay 3, 2026, from
https://web.wakayama-u.ac.jp/syllabus/L1/L1_L1180024_L1_ja_JP_81.html. [シラバス参照「合奏法」(2024).]

付記

4. は第二著者の坂本が執筆し、それ以外はすべて第一著者の島田が担当している。本稿中で「筆者」とある場合は、第一著者を指す。

謝辞

本稿の内容確認をして下さった京都女子大学教
授の荒川恵子先生に御礼申し上げます。